様式第２号

平成２８年度　　独 創 的 研 究 助 成 費 実 績 報 告 書

平成２９年３月２３日

<table>
<tr><td>申　請　者</td><td>学科名</td><td colspan="2">看護学科</td><td>職 名</td><td>助手</td><td>氏 名</td><td>山形 真由美</td></tr>
<tr><td>調査研究課題</td><td colspan="7">医療処置を必要とする高齢療養者を介護する配偶者が感じる困難感</td></tr>
<tr><td rowspan="3">調査研究組織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td colspan="2">所属・職</td><td colspan="2">専門分野</td><td colspan="2">役割分担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>山形真由美</td><td colspan="2">看護学科・助手</td><td colspan="2">在宅看護学</td><td colspan="2">面接・分析・論文作成・研究総括</td></tr>
<tr><td>分担者</td><td>名越恵美</td><td colspan="2">看護学科・准教授</td><td colspan="2">がん看護学</td><td colspan="2">分析・論文作成</td></tr>
<tr><td>調査研究実績の概要</td><td colspan="7">研究テーマ：医療処置を必要とする高齢療養者を介護する配偶者が感じる困難感

概要：在宅医療の推進により医療処置を必要とする在宅療養者は増加している。高齢の配偶者介護者が医療処置を担って行く場合、自身の老化に伴う困難さも生じると考えられる。そこで、本研究では、高齢で医療処置を必要とする療養者の配偶者介護者が医療処置に慣れて介護を継続する中で感じている思いを明らかにする。意義は、そのような介護者に対する支援内容の示唆が得られることである。

方法：医療処置に関する情報を周知する訪問看護ステーションから、70歳以上で個々の状況に合わせて医療処置を習得している配偶者介護者の紹介を受けた。倫理的配慮の説明を行い同意が得られた研究参加者に困難と感じることと対処、継続の秘訣、先行きへの不安、必要なサポート、介護者の体調、などで構成したインタビューガイドに沿って、半構造化面接を行った。得られたデータを逐語録とし、Krippendorffの内容分析の手法でコード化、カテゴリー化を質的帰納的に行った。岡山県立大学倫理委員会承認を得て行った。

結果：研究参加者は、70代後半～80代後半の男性2名、女性2名で、医療処置が必要になってからの介護年数は1年以上5年以下であった。配偶者介護者(以下介護者)が語った内容から27サブカテゴリー、抽象度を上げ8カテゴリーを抽出した。研究参加者は、医療処置に関して【医療処置の手技に対する自信】を持っていた。それ故に状態変化を予測でき【生活の中に常にある医療処置に伴う気がかり】があった。【医師や訪問看護師の対応への信頼】はこの気がかりを軽減していた。また、口先の慰めではなく実働するか否かが【副介護者や周囲の人への肯定的・否定的感情】の分かれ目であり、特に医療処置の代行ができる副介護者の存在に助けられていた。老化に伴う困難さには、療養者の【進行する認知症への理解と対応時の憤り】と、介護者の【後回しになる介護者の健康管理への自覚】があった。これらの折り合いがつかなくなった時、在宅療養が限界になることが示唆された。福祉サービスに関しては、認知症による意思疎通困難を心配し【福祉サービス利用に対する不安】をもっていた。そして介護者には、夫婦として生きてきた人生の終局を任されている【夫婦の終局への責任感】があった。
【】はカテゴリー、《》はサブカテゴリーを示す。
・現在追加分析中

研究テーマ：医療処置を必要とする高齢療養者の在宅療養継続に関する訪問看護師の実践知
・第36回日本看護科学学会学術集会にて発表</td></tr>
</table>